



a 豊岡地神 余市町豊丘 豊丘神社境内



b 江幌2地神 上富良野町江幌2

北海道の地神塔

その覚え書き

梅原達治

はじめに

……昔は、馬頭さん地神さんは、たいてい各部落ごとになり、馬頭さんは牛馬の神さま、地神さんはその土地に住まわせてもらって有難いという意味でしょう。

……馬頭さんや地神さんを建てる向きは、大山の方を向いています、大山から神をお呼びするためでしょう。

(長尾、一四―一五)

これは一九五八年、紋別市大山町三丁目に建立された大成部落の馬頭観世音と地神(長尾、一三二)についての谷口義雄氏の談話の一部である。この談話にあらわれている地神についての観念を抽出するとつぎのようになろう。

- 1 地神さんは馬頭さんとともにたいていの部落にある。
- 2 地神さんは住んでいる土地の神であり、感謝すべき対象である。
- 3 塔は神がみのおわします聖なる大山に向かって建てられている。

る。

まず、たいていの部落にあるという点について簡単にふれば、このことは日本全体にみられる現象ではなく、また北海道全体にみられる現象でもない。北海道でも特定の地域にみられる現象である(小林1、七九)が、それらの地域では、それぞれの部落において欠かせないという共通の認識が形成されているようである。そのような地域では、郷土史などは、とくに地神がどのようなものであるか、記述を省略しても、読者はなんら痛痒を感じることとはなからう。雨竜郡雨竜町は地神社の多いところであるが、『雨竜町史』は地神がどのような神徳を備えているかの説明をおこなわずに、つぎの記述をし、各地神社についての描写に移っている。(雨竜町、四二二)

私共は、木立の中に静かに鎮座する地神宮を本町の各所で散見する。

地神宮は、その昔開拓者のいのりの姿を偲ばせる。遠く故里を離れ未開のこの地にくわ入れしてからの毎日、苦勞の連続

であった。この苦しみを共に語りなくさめあう事の出来たのは、この地神宮であったであろう。

私共は今、先人の地神宮に祈る尊い姿をしのび、今日あるを考える事はまことに意義深いものがある。

これによれば、地神宮は開拓農民の精神的紐帯の役割りをはたしたものと評価されていると解することができよう。

さて、地神について農民が期待される役割りはそれらが「地神様、地神さん、地がみさま」と呼ばれるなかで「作がみさま」^(三)とも呼ばれるところもある(岸本、六二九)ように、農産物を育てる土地の神であり、豊作を祈願し、感謝する神であるとの意識が強いようである。これはのちにも触れるが、五神名型地神塔の祭神に冠せられた神徳をあらわす、大地祖神、五穀護神などからもその奉斎の意図を推測することができよう。

このように地神は北海道ではほぼ部落共同の作神として奉斎されているようであり、そのように考えることに重大な支障があるとは現在では考えられないが、地神は「ぢちんさん」と呼ばれることがきわめて多く、また苦



図1 「地鎮神」文字塔
苦小牧市勇弘、恵美須神社境内、
かつて同市静川にあったものとの
こと(扇谷昌康氏による)。

小牧市勇弘の恵美須神社境内などには「地鎮神」の文字塔がみられる(図一)ところからも、地神が作神と等価であるにしても、その基盤にあった旧来の観念を引きずっているとも考えられる。(松村3、三三―三四)とくに新しい土地を墳墓の地と定めて開拓に従事した人びとの心境には、死んでその土地に化し、やがて作物を慈育する神になるという観念(大護2、一八)なども農民の心理の深層に潜んでいることも考えられないこともない。

また、われわれの生活においては現実の世界と、いわゆる超自然の世界とを区別して考えることが多く、現実の世界を支配する法則を探究し、そこに見出された自然科学の法則を自然界に適用させる技術を優先させているのが現代社会であるとの考え方はきわめて強い。このように考える人びとにとっては、魂のやすらぎや死後の世界というような分野だけではなく、現実の問題の処理にあたって超自然的存在に依存することにたいしては、文明人としては時代遅れの態度とみなされることが多いようである。かつて、レヴィ・ブルールが唱導した未開人の心性の「未理論的」思惟方法などがもてはやされたことがあったが、これも未開社会の人びとが理論的に思考することを否定したものでなかった。人類学は「原始人」と文明人との境界をすくなくとも *Homo sapiens L.* (現生人)のなかから追放した。(梅原一)そして、現生人にはじめてみられる埋葬に「人間性」を見出している。すなわち、言語や宗教こそ、人間が他の生物と区別される人間の専有物である。現在の合衆国において、技術がもっと優先されるべき落下傘部隊や職業野球選手の世界にも呪術Ⅱ宗教的慣行が広まっていることが報告されている。(Weiss, 九八

一〇三) (Gmelch, 一〇四—一〇八)

地形上の一つの高まりにすぎない大山に特別の意義を与え、それに向けて造塔をして大地への感謝の意を表わし、生活の安泰を托す行為こそ、人類が進化の過程で発達させた知的能力とともに、その過程で獲得した象徴を作る能力によるものである。これは技術的次元とは別の次元に属する事象であり、人間が人間であるかぎり、形は変わってもこの次元の事象が消滅するとは考えられない。大成部落の地神塔の造立は比較的新しい。今後このような造塔は減少するかもしれないし、また、この塔のはたす役割りは変化するかも知れないが、この次元の事象の重要性が消滅することはない。

本稿はこれらの点についてとくに探究するものではないが、地神塔にたいする接近は懐古的なものだけではなく、今日的な問題を十分にもつものであることを意識しなければならぬ。

また、「覚え書き」と題したように、とくに地神信仰にたいして総合的・体系的な論考をこころみたものではなく、たまたま目についた二基の地神塔をとりあげ、それについて思いついたいくつかのこととがらを書き記し、今後の参考に資せうとするものである。

注

- 一 「ぢちんさん」などとよばれている顕造物を筆者は地神塔と呼んでいるが、個々の地神塔にたいする記述は、「地神社」など原典に記されたものをそのまま引用している。
- 二 雨竜町の北に接している雨竜郡北竜町についてつぎの記述がある。(小林1、七七—七八)(一部改訂)

……北竜村に就いて調査した結果村内に十七ヶ所あることが判明した。本村は行政区劃が十七に区分されて居り、従って大体各部落毎に一ヶ所ある割合である。戸数は一、〇六五戸(昭和九年末)の中農業七七四戸即ち約七割二分強に当る。面積約十一方里強であり、農耕地作付反別約三千四百町歩を算し、大部分が水田であつて約二千四百町歩即ち七割弱にのぼっている。之に依つて見ても分る通り、本道に於ける典型的米作地帯の一である。移民の出身地は富山と徳島が首位を占め、一般に北陸、東北、四国方面等が多い。

然らば十七部落の中、何処が最初に祀られたかということ は中々容易に判明しなかつた。何分明治二十六年に開拓の緒に就いてから幾変遷があり、農場主も数次代り、小作人の出入も尠くなかつた。当時の古老の中残存している者を捜し出すことも困難である。然し兎も角大体四国の移民、殊に香川、徳島の出身者が常に率先して創設を提唱したという事は判つて来た。四国出身者の現在しない村でも嘗つて何年か以前に彼等が残しておいたものが後で農民が再興したものとか、又は付近の村落に四国の移民が多くて自然にこの神が祭られて いるのを見て、未だ神様がなほ部落で之に倣つて建てたとい うような例がある。右の調査の結果から地神宮が四国移民と密接な関係を持つてゐること、並に農業者のみの祭祀であるといふ二大事実が動かす可からざることの例証を得た……

つまり、北竜村での調査は、地神宮の造立は、徳島、香川両県人が率先しておこなつてゐること、出身地がそれ以外の農民も

その慣習を継承したり、見ならつてゐること、農神あるいは作神とは書かれていないが、農民の信仰であることを明らかにしたことを述べている。

三 後志地方の留寿都町、喜茂別町などいわゆる「山麓」の町村にも多くの地神塔がみられるが、現地の人々は「阿波衆の神様であるが、農の神である」といつてゐることである。(黒崎八洲次良氏私信)

豊丘地神 図版 a

余市郡余市町豊丘

豊丘神社境内

付表、a

余市町市街の沢町からヌツチ川に沿ひ南西方に溯ると豊丘地域にはいる。海岸からやく四キロメートルのところに豊丘小学校があり、その敷地に接して神社がある。その鳥居には「下山道神社」の社号額が掲げられている。豊丘はかつて下山道と呼ばれ、上山道とともに山道村を構成していた。山道村は一八八四年に設置された仁木外二村戸長役場の管轄のもとにおかれ、一九〇二年には余市郡大江村の大字となった。上山道には礫石が多く地味はやせて農耕には適さないが、下山道は低地で灌漑による稲作も可能であった。ここには安政年間(一八五四―六〇年)、青森県人が定住、余市方面へ種子の行商をはじめたが、一八八一年には福岡県からようやく一〇戸が入植、さらに一八八八年には徳島県から六戸など逐次移住者が増加し

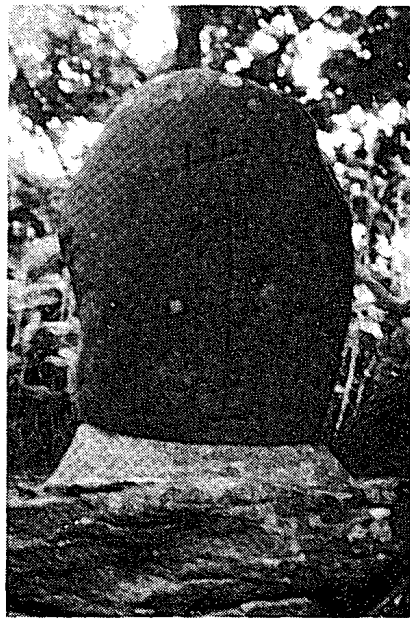


図2 「山神神社」文字塔
余市町豊丘、豊丘神社境内
の文字塔がある。(図
二) 社殿は
東南に向い
ており、地
神塔はその
西南側に神
殿と同方向

て一三〇戸を越えるまでになったが、一九二五年には大江村をはなれ余市町に併合されたところである。(仁木町、一七〇、一二五三)この神社は奥山道と中山道の八幡神社と下山道、中の沢の山神を合祀した八幡社で、春秋の社日祭をおこなつており、(余市町、三二一八)「明治十八年(一八八五年)の紀年銘がある「山神神社」の自然石にむけて造立されており、その向かつて右手前には手水石が備えられている。「竿石の石材は凝灰岩で、かなり風化しており、台座や基礎は何度も改修したため建立の年月日が不明である」と記述されているが、(前田1、三二)もう少し詳細に述べてみよう。この地神塔の外形は一般の角柱塔ととくに変わったところはみられない。コンクリート製の箱石、台石は五角柱の一層、その上に五角柱の塔身がある。箱石の側面には玉石が埋め込まれており、上端は雲石のように張り出させているように見える。この上部は一辺八五センチメートルくらいの正方形で、コンクリートで覆われた上面の向かつて右側後部に「昭和拾一年・九月八日・青年團・之建」と押圧したように書いてある。台石は高さ二四センチメートル、幅三一センチメー

トルであり、塔身は高さ七四センチメートル、幅一八センチメートルで、上部は五角錐になっている。

さて、ここでとくにこの豊丘地神をとりあげたのは、塔身に刻まれた祭神に、それぞれの性格を示すものが冠せられているからである。



図3 豊丘地神第1面 豊丘神
余市町豊丘、豊丘神
社境内

この五柱の祭神をどのように表現しているか、つぎに示そう。正面を

中心にして側面を展開させてある。(付表、a)

- | | |
|------|-------|
| 土御祖神 | 壇安媛命 |
| 五穀祖神 | 倉稻魂命 |
| 農業祖神 | 天照大神 |
| 五穀護神 | 大己貴命 |
| 五穀祖神 | 少名毘右命 |

このような地神塔は岩内郡共和町西老古美(付表、b)と仁木町大字大江村の大江神社の境内にもみられる。(付表、c)後者の造塔は一九〇三である。西老古美の塔の台座には「明治十七年三月建立、岩内郡中」の文字が発起人八名の氏名とともにあり、建塔が一八八四年であり、現存する道内の地神塔では最古のものであると推定されている。(前田1、一四一―一五、二八―三〇、四八、同2、七)仁木町の大字仁木村は徳島県麻植郡児島村(現在の川島町)に生まれ

た仁木竹吉が、一八七九年、麻植、阿波、美馬郡等、徳島県(一八七六年から八〇年までは高知県)の農民一一七戸、三六八名の移民団を入植させて開かれたところである。入植した場合、郷里の文化

が移植されるのは特異なことではなく、同村には地藏尊を安置した仁木八十八ヶ所がつくられ、お大師様のご命日である旧暦の三月二日には善男善女が「同行二人」と書いた笠をかぶり、杖を持ち番所番所に供物を供えて詣り、番所の寄進者は参詣者に餅などの接待をするという四国のお遍路さんに対応する行事がある。(仁木町、七八四―七八五)現在同地の仁木神社の境内には絵花崗岩造りの塔身の高さ一四〇センチメートル、一辺の幅やく三三センチメートルの大きな地神塔がある。これは昭和四〇年代に建てなおしたもので古いことは不明である(前田2、一一)が、祭神の性格を示すものは冠されていない。(前田克己氏の御教示による)同町の大字大江村は旧長州藩の毛利家が廢藩置県後の藩士の窮乏打開と政府の北辺警備政策に添うて企画した事業として開拓されたところで、一八八二年から八四年にかけて移住がおこなわれた。大江村とは毛利元徳の遠縁、大江広元を追慕しての命名である。(仁木町、九九―一〇二)毛利家の開拓事業にあたっては岩内郡掘株川北岸の地に植民地を希望したが、やむなく余市川の奥地に入植させられたという経緯がある(仁木町、一〇〇―一〇一)が、西老古美と豊丘、大江両者とのあいだの直接の関係については不明である。豊丘および西老古美と大江の地神についてわかっていることといえば、豊丘と大江が五角柱の塔身をもつ地神塔の造塔をともなう地神信仰の中心である徳島県出身者によって開かれた大字仁木村に接しており、とくに豊丘は

徳島県人などの移住が発展の契機となった地区である(仁木町、一〇七)ということなどにすぎない。

一七九〇年、当時勢力があつた徳島城下富田八幡宮の祠官早雲古宝が藩主治昭に説いて各村むらに五神名型の地神祠を奉斎させた(金沢、三〇〇)が、ここにかぎらず、地神として人格神を特定する場合、天照大神、倉稲魂神、埴安媛命、少彦名命、大己貴命の五神があてられることが圧倒的に多い^(四)。しかしこのようにそれぞれの性格を示すものを冠したものとすれば、前記五神名について、「その各神名の文字は色々記されて居り、中には神名の上にその主宰する方面を刻んだものもある」(羊我山人、一八)の記述がみられただけである。主宰する方面ということが具体的にどのような表現を指しているのか不明であるが、豊丘地神に類するものをそのように記述することは十分に考えられる。関東地方の地神塔についての報告のなかに西老古美の地神に近いものが紹介されている。それは神奈川県小田原市上曾我の諏訪神社の境内の紀年銘が一七八六年の地神塔(付表、d)である。これは六角柱^(五)で背面には「天下泰平五穀成就・邑中安全・天明六丙午天仲秋」と刻まれている。(松村3、三八、四〇) これまでに知り得た資料によつて、豊丘地神にもつとも類似している内地の地神塔をもとめるとすれば、神奈川県のものをあてることが無難であろう。しかし、五角の石柱に、五柱の神名を刻んだ地神塔について「……五角柱の方は、五台様とも呼ばれ、もと儒者流神道家の編み出したもので」(武田、二九九―三〇〇)といわれ、記紀にあらわれる神を祀ることについて「江戸時代後期に入つて国学が盛んになつてから、国学を学んだ神道家の指導によつて生まれた

地神塔と考えられ」(大護1、四九五)、また社日についても「古くからの社日信仰が神道家によつて五神を配したものに故意にされたものとしか思えない」(同、四九五―四九六)ことは、さきに述べた徳島県の史実にも反するものではない。五柱の人格神が国学にもとずいて選定される以上、たとえば埴安媛命の性格は定まつており、土御祖神と大地祖神はたんなる表現の相違にすぎないであろう。少彦名命についても五穀祖神、五穀護神、五穀守神の三種の性格付けがなされているが、これも造立者、あるいは造塔者に助言を与える者の表現の相違によるものとも考えられても、根本的な発想の相異ではあるまい。つまり五神名地神塔の造塔理念が同一であるかぎり、このような形態のものに発展する可能性はどこにでも存在するといえよう。いずれにせよ、現在の段階で、これらの形態の地神塔の内地での原型を早急に推定することは賢明ではあるまい。

注

- 一 大江地神の表現について、豊丘地神と異なる点は「少名毘古命」と「少彦名命」の部分だけであるとの指摘がある。(前田1、三一)が、豊丘地神塔では少名毘古命と書かれる字体で刻まれている。(図四)少彦名命を少名彦命と書かれている例は多い。またいわゆる誤字の使用と思われる例も多数みられる。(前田1、三六一―三三八、同2、八一―九)このような事象について、個々の地神に独自性をもたせようという意図が文化要素の一つになつていてのではないかと推測したことがある。(梅原2)

二 現在仁木町は川島町を姉妹町として交流をおこなっている。

三 「大己貴命等五神地神塔」という用語が、五柱の神名を五角柱の石にそれぞれ刻んだ地神塔に使われている。(大護1、四九四―四九六)岡山県小田郡矢掛町の萩原の地神塔は五角柱で、そこには「五大地神」の文字がみられる。(松村2、四〇)(付表、e)注五に述べる沼代地神にも「堅牢地神五道大神」の文字がみられる。五大地神という觀念に具体的な記紀の人格神を配したとすれば、両者は基本的に五神型と呼ぶことはできるわけであるが、塔自体の表現形式からみた場合、ある程度の異和感がみられる。そのために、一般的な五神名を配した形式を冗長ではあるが、とくに「五神名型」と呼んで取り扱うことにする。

四 香川県(加藤、二五―二六) 兵庫県淡路島(直江、二八八、和田、一五三)、岡山県(島村、二〇四)、神奈川県(付表、d)、本稿でも紹介した千葉県(服部、四七)、埼玉県(武田、二九九)



図4 豊丘地神第4面神号
余市町豊丘、豊丘神社
境内

などの例を参照のこと。

五 六角柱の地神塔はこのほかに神奈川県中郡比々多村神戸(現在は伊勢原町)の木下霊神境内(武田、一四八図)(付表、f)や同県小田原市沼代(松村3、三八・四〇)(付表、j)の地神塔がいられている。

また、徳島県の地神祠については、心柱は「五角柱が普通であるが高原地北のものは六角柱になっていて一面に年号を刻んである」(羊我山人、一七)の記載があるように、六角柱のものも一般には台石などに刻む紀年銘などをとくに背面など的一面を付加して刻銘したものと解釈され、五神名五角柱型の変形と考えてもさほど支障はなからう。



図5 有島神社、五神名六角柱型
地神塔
ニセコ町有島、彌照神社境内

北海道でも豊丘町に接する余市町美園町と虻田郡ニセコ町有島の彌照神社などでみられる。(図五)(付表、g)これについてはつぎのよう

に記されている。(小梁川、七)

……場内の弥照神社裏の狭い所に、熊笹にかこまれた石柱を見たのである。これは六角で台座は粗末な饅頭型コンクリート、柱には五神のほかに建立年月があつて六面だった。この神

社は農場開設の明治三十三年に建てられて、後に現位置に移されているが、碑の位置が奥殿に当たる場所だから、神社の御神体として後に建てたものらしい。大正十三年八月の建立である。

これについて、「竿石は羊蹄山の安山岩で高さ九五センチ、一辺の幅一六センチ、正面は……」と神名の記載があり、さらに「そしてちょうど天照大神の真うらになる第四面に大正十三年八月建之と刻んでいる。台座は高さ二八センチ。八〇センチ×九〇センチ幅の平たい自然石、その下に基礎土台石積三段で上辺は一八〇センチ四方、下辺は二二〇センチ四方の堂々たる地神碑である。六角形なのは、地神五神を刻むとともに、もう一面に建立年月日を入れるため六角柱にしたものだ」とのより詳細な記述もなされており、さらに「弥照神社は、あの有名な有島農場解放の時に、有島武郎が、小作人を社前に集めて開放宣言をした所である。今は内に御神体もなくたゞの空家同然で、地神祭の時だけここを使うらしい」とも記されている。(前田2、六)

美園部落地神は一九〇七年の建立で、竿石は軟石で風化が進んでいるが、農神系五柱の神名のほかに、背面に設立年月日と発起人氏名が刻んである。(同、六)(付表、h)

また地神塔が三七・八ヶ所あると指摘されている十勝地方、中川郡幕別町(小林2、五五)の中里(旧称は上糠内)も裏面に紀年銘と造立の趣旨を記した五神名六角柱型の石塔が社殿の向かって左側に建てられている。(付表、i)中里神社について「昭和三年七月十一日、大須賀牧場敷地内の稲荷大明神社と、

奥糠内にあつた地神を合祀して上糠内西一線に移転し、「上糠内神社」と呼称することとした」と記されている(中里、七二)が、詳細は不明である。

江幌二地神 図版 b

空知郡上富良野町江幌二
付表、k

富良野市と旭川市を結ぶ国道二二七号を上富良野市街の北で、北二八号に沿い北西に静修方向に道をとると丘陵が迫ってくる。ここでは江幌完別川の支流の沢のわずかな氾濫原が水田になり、農家が散在している。この地神について「トラシエホロカンベツ川のほとりに、角石三段積み五神の地神がある。水田の中だ」と記されているが一九四九年一月七名のもがつくった新らしいものである。(上富良野町、四二七)この地神を観祭した一九七五年には、これが「ジチンシャ」と呼ばれているが、造立世話人が離村しているため詳細は不明であるとの聞きとりしかできなかった。さきの記載のとおり、この石塔は川を背に道路に面してほぼ西向きに立てられている。地盤、二層の台石、塔身はすべて正方形の平面で、下層の台石は方柱を前後に並べてある。塔身は高さ六八・五センチメートル、幅二六センチメートルで上面はごくゆるやかな勾配の正四角錐をなしている。正面にはほぼ一〇センチメートル平方の文字で、天照皇大神、両側面にはやく五センチメートル平方の文字でそれぞれ二柱の神名が二行に刻まれている。神号は向かって右側面には前方が忍

穂耳命、後方が彦火出見命、向かって左側の面には後方が大己貴命、前方が瓊々杵命である。また上層の台石の向かって左の側面には発起人七名の氏名が刻んである。また昭和二十四年十一月建立の銘もある。一般には造塔は三月か九月の社日になされることが多いようであるが、十一月であることが多少気にかかる。五神地神塔の塔身の平面は正五角形であるが、これはその形に拘泥していない。また

図6 江幌二地神、五神名四角柱型地神塔



上富良野町江幌二

この塔の両側にはイチイが植えてあるが、上川地方には、このように塔の両側に神籬として樹を植栽するという要素が意識されているところがいくつもある。図六) 千葉県海上郡海上町の七部落の田ノ神についての報告がある。(服部、四七―四九)

その一つは藁宮で毎年造り替えられるが他は石祠である。そのうち三部落のものは宮形石祠であり、三部落のものは五角柱に天照大神、倉稻魂神、大己貴命、埴安媛命、少彦名命の五神名を刻んだもので

ある。五部落は鎮守の境内にあるが、二部落は独立した敷地にある。祭礼は春秋の社日におこなわれた。このなかの独立の敷地をもつ幾世の田ノ神様の祭典の写真と図解がある。これによれば五角の御神柱の五側面にそれぞれ神幣を捧げ、さらに新しい藁でつくった敷物を敷いて高脚膳の神饌を五膳そろえて供える。神柱の周囲はこの敷物を敷くだけの空間をとって玉垣を巡らせているが正面はあけてある。その入口のところの両側に神籬として青竹を二本立てて白扇を麻で結んである。植栽はこれを恒久化させたものであろう。

地神塔に祀られる神がみのなかでもっとも優勢な五神はさきにも触れた。これは余市町豊丘地神や千葉県海上町の田ノ神にみられるものである。しかし、北海道の地神塔には天照皇大神、天之忍穂耳命、瓊々杵尊、彦穂出見命、鷓鴣草葺不合尊の名が登場することがあり、前者を農神系、後者を地祇系と分類する試みがある。(前田1、一四―二二、同2、七―八)内地で地祇系(地神五代)の神がみの名を記した塔の報告にはまだ接していないが、北海道の例としては磯谷郡蘭越町相生三の自然石型地神塔(梅原3、図版II b)のほか、虻田郡倶知安町旧市街にもみられる。(倶知安町、表)江幌二地神の神号、彦火出見命は彦火火出見命に由来するものとする、大己貴命はさきの分類にしたがえれば農神に属するものであり、この五神は地祇系の鷓鴣草葺不合尊にかわって農神系の一員である大己貴命が加えられたものといえる。さて、神奈川県藤沢市を中心に一〇基にもみえないが、この地方の具像塔がある。この像は堅牢地神を祭ることと知られていた藤沢の北東、西俣野の御獄社の別当神札寺が発行した御影を模したものである。(松村1、七二、

七四、同3、四一―四五)このほかいくつかの宗教などの機関が地神信仰の弘布にあづかっている。また、徳島県の場合もそのようにいえよう。また千葉県海上町清滝部落の田ノ神が藁宮で毎年造り替えられるものであり、他の六部落の恒久的な石宮とが併存している。

(服部、四七―四九)このことだけでただちに五神名形式を土俗的な信仰に、国学の観念が付加されたと結論することには無理もあろうが、徳島県や神奈川県歴史からみても、千葉県においてもこれらと平行した現象があったとみるべきであろう。土俗的基層のなかに職能的宗教者の洗練された教義が付加されたり、あるいはそれによって代置されて、洗練された儀軌が確立されても、それが民衆の次元で伝播、受容される場合、最初の形態から、自律的に乖離する作用が働くことはありうると思われる。

北海道の開拓地においては、専門の知識をもつものも少なく、いわゆる民間信仰として職能者の規制をうけることなく伝播することも多かったと考えられる。

網走地方の紋別市にも現在二八基の地神塔が知られている。(長尾、一二九)同市上渚滑町中渚滑にも四基の地神塔があるが、これについて古老はつぎのように語っている。(中渚滑、一六八)

地鎮祭は土地の神様を祭ろうということで大正初期ごろから渚滑の川向あたりのものを真似て始められたものだが、これが一つの楽しみだったわけです。余興としては明治三十三年頃から始めており、大人も子供も相撲をよく取ったものだ。体格のよいアマチャの相撲とりがきたりして今より盛大にやった。それと、お宮の所から二〇線(国道)まで競馬もやっていた。お

祭の寄附も高額でみんなが張切って出したものだ。それに戸数が多いので盛大にできたわけだ。賞品がもりたくさんあるので、アマチャの相撲取りも地元の人たちと取り組んだものだ。昭和に入ってから、素人だけれど、学校のグラウンドで自転車競走なんかもした。参加したのは、上渚滑・滝上・渚滑の人たちである。その後、活動写真も野天で何度も見せ楽しませてくれたものだ。

祭典の情況についての談話であるが、このように地鎮祭が近隣部落の模倣として自発的に移入する場合、どのような形として受容するかは自由であるが、その伝播経路が近いものほど類似性が高い確率は増大し、同一地方には類似度の高いものが分布することが多くなるということができよう。勇払郡占冠町を含め、空知郡上富良野町、中富良野町、南富良野町および富良野市を包括した富良野地方の一〇基の地神塔についてみた場合地神塔はすべて文字塔であり具像塔がないとしてさらに祠堂のある地神が富良野市と南富良野町の連続した地域に集中して分布していることを指摘したうえで、垣山姫命と刻ったものが多いことについては、つぎつぎに古い地神を見習ったことに起因すると推定されている。(岸本、六三三―六三五)

さきに地祇系地神の内地における例については未見であると述べたが、地祇系五神名型である上富良野町旭野中之沢地神(付表、m)と富良野市山部南陽地神(付表、n)をとりあげて「この二つの形式はいずれも四国出身者によってつくられたことがわかっているだけに注目してよい」と述べられている(岸本、六三三)

中之沢地神については「中之沢の水音を背景に見上げる様な高さ

である。記念碑の形で火火出見命、忍穂耳命、天照皇大神、瓊瓊杵命、鵜屋葺不合命が神名^{（註）}で鳥居がついているのが特色である。この高い地神に水松、桜、カラ松が森をつくっている。大正八年に創祀し、春は社日、秋は九月十八日が祭である」と述べられている（上富良野町、四三〇）がとくに四国出身者との関係は触れられていない。また地域の開拓についても、一九〇七年、山形県人が入地したことに触れているだけである。（同、六八二）ただこの地域に接する十人牧場（旭町第二上下）は、一九〇六年徳島県人の一団一〇名が岩見沢町より移住したところであり、（同、六八二）中之沢地神の創祀と関係があるのかもしれない。しかし、同地（旭野二）の地神の神名（付表、〇）は中之沢地神と異なっている。（同、四三〇—四三一）

富良野市山部は、東山村として独立した東大演習林および北大第八農場と山部御料林との三つの機関を母体として開拓され一九一五年、下富良野村から独立^{（註）}、一九六六年、富良野町と合併して富良野

市の一部となったところである。南陽は北大農場でも高台とよばれた山麓の扇状地の奥に位置し、あまり永住の希望者はなかったといわれている。（富良野市、六〇七）南陽地神の創祀については、「山部第二小学校の杉山常雄（俳人月魄）の先導によって創祀されたという……」との記載がみられるだけである。（富良野市、六一一）南陽の北に接した東部が中央東であり、この北部には南部団体が入植、大津見神をまつた南部神社を部落の神社としているが、南陽に近い南部には徳島県人が多くはいる、徳島組とか阿波組と称されている。この地域には二基の地神塔があるが、いづれも農神系とみなされるもので、（富良野市、五九五—五九九）地祇系の影響はみられない。現在では地祇系祭神の由来を内地に求める系はここで途切れている。

表は富良野盆地の五神名型を分類したものである。a 農神型、b 地祇型、c 混合型、d 混入型と分類した。a、bはともに農神、地祇のみでの組成、cは一部が農神系、一部が地祇系であるもの、d

表 富良野盆地の五神名型地神塔の分布（上富良野高、二七—三一）

	地神塔数	五神名型	農神型	地祇型	混合型	混入型
計	91	35 (38)	13 (37)	3 (9)	5 (14)	14 (40)
上富良野町	17	7 (41)	—	2 (29)	5 (71)	—
中富良野町	22	5 (23)	5 (100)	—	—	—
富良野市	52	23 (44)	8 (35)	1 (4)	—	14 (61)

（ ）内は百分率を示す。

は祭神の一部に農神系にも地祇系にも含まれない祭神が混入しているものをさしている。(付表、p)形式的には地祇系のなかに農神系以外の祭神がはいっているもの、および混合系に両系以外の祭神が加えられたものもありうるのであるが、この場合は農神系の一部にその他の祭神が混入したものののみがみられた。

表からおおよそつぎのことを読みとることができる。

- 1 上富良野町は地祇型が優勢である。
- 2 中富良野町はすべて農神型である。
- 3 富良野市は混入型が優勢である。

混入型は一例をのぞき猿田彦命がみられる。

これを地神塔形式の地域性とすれば、これを移住の地域性と結びつけるわけにはゆかない。というのは、さきにも富良野市山部について、南部組や阿波組がみられたように、ここに述べる地域をより細分したモザイク状に異なっているからである。つまりa地域の特性は内地のA地域(単一地域とはかぎらない)の影響をうけたもの、b地域の特性は内地のB地域の影響をうけたものという図示はあてはまらないのである。「地鎮さん(地神社)の出来たのは大正二年で、その時は各部とも一せいに建てたものでした」との記載(山部町、五一五)からも、一定の状況のもとに特定の刺激が地域全般に広がり、地神塔が造立されたことがうかがわれる。つまり、道内の地神塔の伝播は、内地から直接移入されたものではなく、道内の二次的中心からの影響が大きいのではないかと考えられるのである。

註

一 神籬には、通常このようにイチイ(アララギ、オンコ *Tanus cuspidata* Sieb. et Zucc.)などの常緑樹がもちいられることが多いようであるが、富良野市学田一区の自然石文字塔の両側にはウンリュウヤナギ (*Salix matsudana* Koide. forma *fortis* Rehder) が植えられている。(図七)



図7 北大沼地神
富良野市北大沼1
杉浦重信氏撮影

二 これについてはずでに指摘されているように(松村2、一六) 覚禅鈔には「疏五云。地神当棒持宝瓶。虔恭長跪。其瓶中置種々水陸諸花」などの記述があり、それらの姿が図示されている。(仏書

2、二二七一―二二七六) また、阿婆縛抄も地天を取扱っており、(同1、二二四一―二二四二) 形象について
○玄法軌云。西天。地神持宝瓶。文 青竜同。
衆中。

などの引用があり、図九六は地天像を示している。

また、高雄曼荼羅にみられる堅牢地神の形象を示したものである。(武田、三〇〇)および挿図一六)以上の文献は鮮花などの鉢をもつもののほかに、戟をもつ男神のような姿をするものなどがあることも示している。

まえに女満別町の五層塔地神について触れたことがある(女満別町、六九四)(梅原2、三八)が、これは作神として奉祀されたものではないとのことであった。

また福岡県三潴郡三潴町草場および同町小犬塚の天満宮には、それぞれ石祠のなかに神像を示した社日塔がある。(猿田彦研、四五)神奈川県や福岡県からの移民はきわめて少数であると考えられるため、このような地神塔の移入する機会は少ないと考えられるが、その他どのようなものが地神塔として奉斎されているか想像することは困難である。特異な形式のものを見逃している可能性がないとはいえない。

三 福岡県下を中心とする地神についてつぎの記載がある。(築紫、一三七—一三九)

地神の祭りは、現在では神職の手によって行なわれるばかりが多くなったが、昔は、盲僧によるものがふつうであった。福岡県下を中心として、玄清法流盲僧琵琶は、昔は鹿児島県下の薩摩琵琶以外の九州全土から中国・四国地方にまで流布した。現在、福岡市平尾の成就院に所属し、天台宗系の僧侶を兼ねた盲僧は、衰微してしまつたが、なお、地神の祭りやかまど神の祭りに読経・弹奏の法要を営む盲僧あるいは目あ

きの僧形者を見るのである。……

この五穀成就の祈禱こそ、順送りの記録に「五穀成就の地神祭」とか、たんに「地神祭」と記されているように、大がかりな地神の祭りであった。

盲僧による地神の祭りは、宅地や工場などの地鎮祭ともなつた。これは、玄清法印の事跡として伝える伝教大師比叡山開創のさいの「地神経」を誦し、琵琶を弾じて、毒蛇悪獸などを追い払った功德いらいのことには属するものであるとされている。

四

近隣部落の慣習を自部落にとり入れたといわれるように、この地方には多くの地神塔がみられる。同市内一六四基の石碑(木造も含む)のうち、馬頭四〇、地神二八、地藏一一基が数えられる。このうち五基は地神宮、一基は社日大師と呼ばれているが、一般には「ちじん・ぢじん・ぢしん」と言われている。(長尾、三五、一二九—一三五)

一九八〇年は庚申年であり、多くの庚申塔が建立されたが、その造立の動機について「後世の人達に、庚申塔を建てることのできなかつたのかと笑われるのはいやだから、庚申年生まれの責任として建立した」とか「親村に負けないため」とか(平出、八二)人間との関係―世間―を意識していることがおおいようである。

五

この地神についてつぎの記載もある。(岸本、六三三)

上富良野町旭野中之沢の地神は
鵜屋葺不合尊 瓊瓊杵命 天照皇大神 天忍穗耳命

彦火出見命

となっている。天忍穗耳命はたゞ忍穗耳命に、彦火出見命は
 火火出見命と刻つてある。

これは塔に刻まれた神号が、観念上の祭神と異なることがあ
 りふれた事象であるとも読みとれる表現である。

また、紋別市大山町一丁目安養園児童公園内のオンネナイ地
 神宮の碑文(付表、1)の説明で、垣安姫命について、ハニヤ
 スヒメノミコトと読み方を示し、肥料の神様であるとしている。

(長尾、三四―三五)

このような点から考えた場合、農神系にせよ地祇系にせよ、
 相当自由な表現が許されたものと類推できる。この点を逆に類
 推した場合、農神系にせよ地祇系にせよ、正しいと思われる表
 現からいささか逸脱している表記も、そこで考えられている神
 は神話などで一般に語られる神であると推量しても、それほど
 おおきな誤を招くと考える必要はなからう。

しかし、注六に記載した山部地神にみられる稲荷魂命が倉稲
 魂命に由来する神号か、稲荷神に由来するものか速断しかねる
 例もみられる。

六 山部町史は町内の各地神の個別の記述をおこなっていない。
 しかし、神社創立の項に資料として「地神さま」をとりあ
 げ「地神社は、農家が信仰する土地の神様である。通称「地神
 様」「地神サン」と呼ばれるが開拓当時から豊じょうの祈願をこ
 めて祭事を行なってきたのである」としている。(山部町、九五)
 そして、同町内の地神の情況についてつぎのように記している。

(同、九六)

地神祭は元より(部落共同)の祭事であり、従つて各部落
 毎に地神社があるのが当然であるが、実際は本村でも五カ所
 にしかなく、二―三部落が共同で一つの地神社をもってきた。

祭の日は、部落の農家全戸から米穀・全品(ついで)など供物を集め
 て祭祀を行ない、特に秋の杜日は子供角力とか青年の演劇・
 農産物の品評会などがかなり盛大に行なわれたものであつた
 が、現在では村の鎮守である山部神社の祭典に合流して余興
 ・行事等は行なわれなくなつてしまつた。しかし祭事は年々
 行なわれてきている。

地神社の形は別図(略)のとうり五角形の石柱をコンクリー
 ト若くは玉石練積の台に載せている。刻まれている神の名
 は本村にあつては正面が 天照皇大神、右に廻つて大己貴命、
 稲荷魂命、垣安姫命、少彦名命の順である。

同町には五基の地神社があるとのことであるが、「部落に散在
 する神と仏・部落の神や仏」として、中央東の二基と南陽地神
 をあげ(岸本、六一―六一九)、北星地神社(明治三八年地
 神として創祀 大正四年社殿建築)として郷土の代表神社とし
 て取り扱っている(同、五九〇)ものをあわせて、一社三基の
 地神の所在を示している。そして部落が共同で奉斎している状
 況はつぎのように示されている。

北星地神 一、二、三、四部。

山部中央地神 七、八、九、一〇部。

協進地神 一一、一二部。

南陽地神 一三、一四、一五部。

また、北星地神の碑については、「祠、神体は鏡」と記されており、他の三基は五神名五角柱の石塔である。また、すべて春秋の社日に祭典をおこなっている。

七 香川県の地神塔にも通常農神型の神名が刻まれているが、普通四柱の神に食物の神であり養蚕の神でもある稚産霊神をとくにくわえたものや、大宮姫命、保食神、倉稻魂命、大巳貴命、大田神と刻まれたものもあるという。(加藤、二五―二六)

おわりに

本稿においては、特異な形態を示す二つの地神塔をとりあげとくに五祭神型の神名について述べた。長文の引用は、北海道の地神信仰に関連する諸状況について知ることと地神信仰あるいは開拓そのものへの理解を深める一助になると思ったからである。覚え書きと題したように雑然とした記述におわったが、このような接近を続けることにより、北海道の開拓という特異な情況にみられた文化をとおして、それまで姿をあらわさなかった日本文化の断面を探る試みが続けたいと考えている。

なお、北海道各地で多くの方がたから、御助力を賜わったが、とくに余市町の前田克己氏や長野県に転じられた黒崎八洲次良氏、また苫小牧市の扇谷昌康氏、さらに富良野市の杉浦重信氏からは貴重な御指導や御示唆を賜わった。また石仏研究会の大護八郎会長や松村雄介氏からも暖かい御助言を賜わり、「日本の石仏」などから多く

を引用させていただいたが、これら先学諸氏の真意を十分に汲みとることができずに、いたずらに恣意的な供用におわることを慮れている。感謝の意を表わすとともに、御寛恕のほどをお願いする次第である。

文 献

梅原達治

- 1 一九七九「歴史はどこまで遡れるか」『無限大』四三。
- 2 一九八一「地神塔の神号」『北海道の文化』四四。
- 3 一九八一「北海道における地神信仰の伝播」『札幌大教養・女短大紀要』一八A。

大護八郎

- 1 一九七七「石神信仰」木耳社。
 - 2 一九八一「石神、石仏にみる作神総論」『日本の石仏』一八。
- 加藤増夫 一九四七(一九七五)「地神さんの話」『民間伝承』一一―四・五(第六巻)、国書刊行会。
- 金沢 治・執筆 一九六七、「藩政と神社」『徳島県史』六、徳島県。
- 上富良野高等学校郷土史研究会、一九八一、「富良野盆地の地神一覽表」『フタヌイ』8。

岸本翠月・編 一九六九『富良野地方史』富良野地方総合開発連絡協議会事務局。

俱知安町文化財保護調査委 一九七八「俱知安町の地神について」。

小林巳智次

- 1 一九三八「農民信仰の実証的一研究 北海道に於ける「地神宮」の分布と実態に就いて」『北大法経会論叢』六。
- 2 一九四八「北海道の農民信仰」札幌中央放送局・編『辺境北海道』北方書院。

- 小梁川 重彦 一九八〇「石碑たちとの出会い」『北海道の文化』四三。
 猿田彦研究会・編 一九八〇『筑後の猿田彦』同研究所。
 島村知章 一九三三(一九七四)「岡山県土俗及奇習」池田弥三郎ら・編『日本民俗誌大系』三、角川書店。
 武田久吉 一九三三『農村の年中行事』龍星閣。
 筑紫 豊 一九七四『日本の民俗 福岡』第一法規。
 直江広治 一九七四(二版)「家の神と部落の神」和歌森太郎・編『淡路島の民俗』吉川弘文館
 長尾 守・編 一九八〇、「紋別石碑散歩」『郷土誌』六、紋別郷土史研究会。
 服部重蔵 一九八二「東総の作神祭―海上町の田ノ神祭を中心に―」『日本の石仏』一八。
 平出一治 一九八一「長野県原村の庚申塔と建立の記録」『日本の石仏』一八。
 仏書刊行会・編
 1 一九七八・一(覆刻版一刷)『阿婆縛抄』六。大日本仏教全書 四〇
 3 名著普及会。
 2 一九七八・七(同)『覺禪鈔』六、同全書 五〇、同会。
 前田克己
 1 一九七八『北の地神さん』えぞまつ豆本 九。
 2 一九七九『野の神々』『京極文芸』一一。
 松村雄介
 1 一九七七『藤沢の石仏』『日本の石仏』三。
 2 一九八一「大和の石仏―庶民信仰資料としての近世石仏―」『大和市史実研究』七。
 3 一九八一「地神信仰と相模の地神塔」『日本の石仏』一八。
 羊我山人 一九四七「地神祠の研究」『徳島県郷土研究論説集』一。
 和田邦平 一九七五『日本の民俗 兵庫』第一法規。

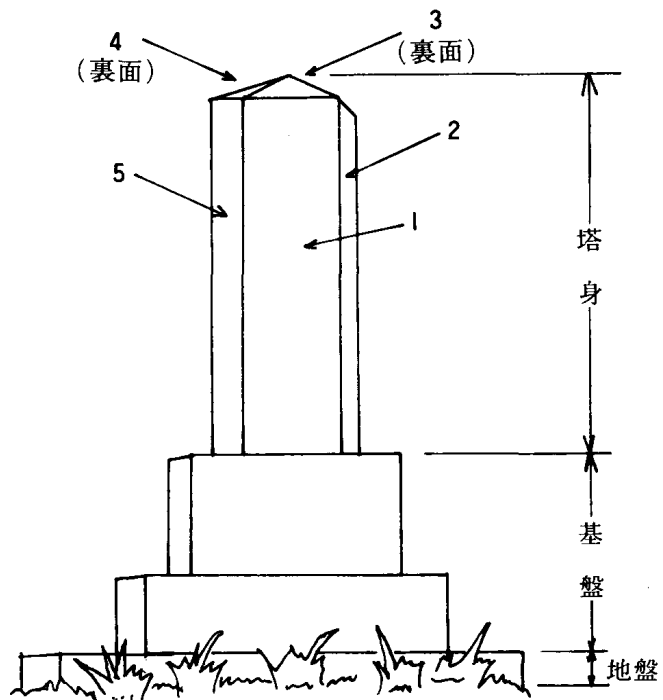
GMEICH, George, 1981, Baseball Magic. GUILLEMIN, Jeanne ed. *Anthropological Realities, Readings in the Science of Culture*, Transaction, Inc.
 WEISS, Melford S, 1981, Rebirth in the Airborne, *ibid*.

郷土史

- 『雨竜町史』一九六九
 『上富良野町史』(岸本翠月・編)一九六七。
 中里『郷土のあゆみ』一九七七。(幕別町)中里公区発足五十周年記念事業協賛会。
 『中渚滑八十周年記念誌』一九七九、紋別市立中渚滑小学校創立八十周年記念協賛会。
 『仁木町史』(川端義平・執筆編)一九六八。
 『富良野市史』一、一九六八。
 『美幌町史』一九七二。
 『女満別町史』一九六九。
 『山部町史』一九六五。
 『余市町郷土誌』一九三三、同町教育会。

摘要

- 地神名は適宜つけたものもある。
- 町村合併などが判明している場合、新しい市町村名にあらため、古い地名を続けてあるものもある。かならずしも正確な表示がなされているとはかぎらない。
- 刻字の順序について明確な記載があるもの、観察によるものには番号を付した。番号は正面を1、向かって右側に2、3、4とつけ正面の向かって左側を5とした。背面は番号を付けないで△をつけた。
- とくに神名の位置についての明確な記載をしてあると明記はされていないが、記述の状況から神名の配列を示すと思われるものは、正面に◎を付した。
- この表の作成にあたり、とくに準拠した文献は太字で示した。
- 文献のなかで、市、町などと記したものは文献の当該市町村史などを指す。また、学とあるのは上富良野高校を指すものとする。
- 分類は体系的なものではない。本文における記載と対応する見出しとしての役割しかもたない。



参考図 5角柱型地神塔
1～5は神号の刻銘された削平側面の位置を示す。

付表 地神塔刻字一覽

神格を冠した五神名五角柱型

a 豊丘地神

北海道

余市町豊丘

豊丘神社境内

3 土御祖神 埴安媛命

2 五穀祖神 倉稻魂命

1 農業祖神 天照大神

5 五穀護神 大己貴命

4 五穀祖神 少名毘右命

前田1、三一・

同 2、一一・

b 大江地神

北海道

仁木町大江

大江神社境内

土御祖神 埴安媛命

五穀祖神 倉稻魂命

◎ 農業祖神 天照大神

五穀護神 大己貴命

五穀祖神 少彦名命

前田1、二八一三〇・

同 2、一一一一二・

c 西老古美地神

北海道

共和町西老古美

大地祖神 埴安媛命

五穀祖神 倉稻魂命

◎ 農業祖神 天照大神

五穀護神 大己貴命

五穀守神 少彦名命

台石に「明治十七年三

月建立、岩内郡中」

と発起人八名の氏名。

前田1、一四一五・

同 2、七・

神格を冠した五神名六角柱型

d 上曾我地神

神奈川県

小田原市上曾我

諏訪神社境内

土御祖神 埴安媛命

五穀祖神 倉稻魂命

◎ 農業祖神 天照大神

五穀護神 大己貴命

五穀護神 少彦名命

△

天下泰平五穀成就

邑中安全

天明六丙午天仲秋

松村3、三八、四〇・

五神名型でない五角柱型

e 萩原宮地神塔

岡山県
矢掛町
萩原宮

五神名六角柱型

f 神戸地神

神奈川県
比々多村神戸
木下霊神境内

g 有島地神

北海道
ニセコ町有島
彌照神社

h 美園地神

北海道
余市町美園町

◎

堅牢地神
湧出地神
五大地神
諸地神等
諸眷属等

村松3、四〇・

- 2 大巳貴命
- 1 埴山姫命
- 5 大日靈神
- 4 倉稻魂命
- 3 少彦名命
- △ 文政四年辛巳二月吉日

- 3 大巳貴命
- 2 少彦名命
- 1 天照皇太神
- 5 豊受姫大神
- 4 埴安媛命
- △ 大正拾三年八月建之

- 3 倉稻魂命
- 2 埴安媛命
- 1 天照大神
- 5 少彦名命
- 4 大巳貴命
- △ (設立年月日と発起人)

前田2、六・

小梁川、六一七・

前田2、六・

図および本文の記述は右のとおりである。しかし大日靈神を正面と考えれば3面は背面となる。

台石に「神戸村・願主・講中」

武田、二九九、一四八図・

北海道の地神塔(梅原達治)

i 中里地神

北海道
幕別町中里
中里神社境内

- 3 少名彦大神
- 2 大国主大神
- 1 天照大神
- 4 埴安姫大神
- 5 豊受大神
- △ 昭和三年納税組合創立
初奨励金下賜記念

五神名型でない六角柱型

j 沼代地神

神奈川県
小田原市沼代

- 天下泰平 世話人 秋沢伊兵衛
- 国土安穩 林丈左衛門
- 八万千六百四神王部類眷属
- 堅牢地神五道大神
- 富貴得成就皆大歡喜信受奉行
- 地頭永代 願主沼代 村中
- 武運長久 明沢
- 天明七丁未年十月吉日 明沢 福泉寺
- 松村2、一八・
- 松村3、四〇・

五神名四角柱型

k 江幌二地神

北海道
上富良野町江幌二

- 彦火出見命 忍穂耳命
- 天照皇大神
- 瓊々杵命 大己貴命
- 台石、発起人七名の氏名。
- 町、四二七・
- 地、六一〇・
- 高、二七・

農神型五神名五角柱型

l オンネナイ地神宮

北海道
紋別市大山町一丁目
安養園児童公園内

- 稻倉魂命
- 垣安姫命
- ◎ 天照皇大神
- 大己貴命
- 少名彦命
- 一九三〇、木柱で創祀。
- 一九三七、石碑に。
- 塔身はコンクリート。
- 一九六六、移転。
- 一九七八、現在地に。
- 長尾、三四―三六・

地祇型五神名五角柱型

m 旭野中之沢地神

北海道

上富良野町旭町中之沢

火火出見命

忍穗耳命

◎ 天照皇大神

瓊瓊杵命

鵜屋葺不合命

町、四三〇・

岸本、六三三・

高、二七・

n 山部南陽地神

北海道

富良野市山部南陽

天忍穗耳尊

瓊々杵尊

◎ 天照皇太神

彦火出見尊

鷲鷲葺不合尊

台座 大正十四年九月建立。

氏子一同

市、六一一・

岸本、六三三・

高、三六・

混合型五神名五角柱型

o 旭野二地神

北海道

上富良野町旭野二

彦火出見命

忍穗耳命

◎ 天照皇大神

瓊瓊杵命

大己貴命

町、四三〇―四三一・

高、二七・

混入型五神名五角柱型

p 学田上五区地神

北海道

富良野市学田上五区

3 少名毘古那神

2 倉稻魂神

1 天照皇太神

5 大穴牟遲神

4 猿田彦神

田部太藏納、

昭和十年九月吉日建

市、四七二・

岸本、六三三・

学、二八・